

白藤について地下に降り、廊下を歩いてある部屋に入るとそこは何もないただっ広いところであった。

「ここは……」

「私の修行場とでも言ったところだ。もともと多目的室だったが、広さも申し分なく、何より人目につかないから中であつたものをすべて外に出し、わが修行の場とした。ここなら誰の邪魔も入らない。はじめなら早くしよう。私にも予定と言うものがある」

白藤は執事風の男から刀を受け取り、そして男に外に出るよう指示する。同時に淳はバッグからペットボトルを出し、ふたを開けて水をばら撒く。

「約束してください。もし僕が勝ったなら、そのときは……。暴力で平和を作るなんてばかげたことはやめてください」

「ならば貴行が負けた場合はどうする」

「え、どうするって？」

「私にだけ条件をつけておいて自分が負けたら何もないというのはおかしいだろう」

「そうですね。わかりました。なら僕がまけたら貴方の言うことを何でも聞きます」

「ほう、いいのか」

「かまいません。その代わり僕が勝ったら」

「わかっている。万に一つもありえんがな」

言い終えると白藤は鞘から刀を抜く。

戦いが始まりを告げるのだった。

「なぜ淳を行かした」

今まさに戦いが始まろうとしている瞬間に雄二は苅部に対し疑問をぶつけた。

「どうということだい？ 何か問題でも」

「たしかにあんたの言ったとおり、こっちの計算どおりだ。だがあんたのその行動は意外すぎるんだよ」

「ふ。答えは簡単さ。まずひとつに勝者である僕は敗者である君らがいくら策を練ろうと勝てないから何をする必要があるってわけじゃあないからさ。そしてもうひとつは」

苧部はにやりと笑い、言葉が続ける。

「僕の計算ともあっているからさ」

「何！」

「僕はね。いや、僕たちは君たち敗者にたいして手間を取ってはいけななんだ。僕自身はそうは思わないけど、白藤さんの命令だからね。だから君たちに対して僕らは策を立てる必要はない。いや、立ててはいけななんだ。だから僕は策というほどではないくらい、ちよつとしたことを考えておいたんだ」

この言葉に雄二は憤りを感じる。

「なめやがって。んで何なんだよ、そのちよつとしたことってのは」

「もし君たちが赤い死神と来たらそのときは君たち二人は僕が足止めする。でももしも君たちが二人だけできたらそのときは僕は一人だけ相手にして、もう一人は白藤さんに任せるってね」

「な」

雄二ははつとする。たしかにこの男のいったとおり、こっちの行動は相手の計算どおりだったということだから、だ。

「い、いやそんなわけねえ。負け惜しみに決まってる」

「いいや、ちがうよ。だったら根拠もついでに教えてあげよう。きみたち二人が来たらどうして分断させるか。それは君たち二人は二人なら楓をも倒すことができるいうことだが、一人一人ならそれほどでもないってことさ。それくらいなら僕は確実に勝てる。白藤さんもどうように、ね。そしてもし方が一僕が負けたとしても白藤さんは君たち一人一人と戦うことができる。しかもそのうち一人は僕との戦いでぼろぼろだ。どちらにしたって僕らの負けはないってことさ」

「ち」

このとき雄二はこの男が言ったことが本当のことであると確信する。いや、もしこの男の計算どおりに物事が動いておらず、今言ったことがただのたためであつたとしても、今この男が言ったことは確かにそのとおりだと思つたからだ。

「でもな。お前ら、淳をなめるなよ。あいつは普段は気は弱くてそこまでかっこいい男じゃないけどな。やるって決めたら絶対にやりとおすかっこいい男なんだよ」

「ふ、負け惜しみに聞こえるけどね」

「それは残念だったな。ほんとのことだ。そして、俺もやるって決めたからには……」

その言葉と同時に雄二はポケットからライターを取り出す。

それを見た苧部は雄二に向かって右手を銃の形にして雄二に狙いを定める。

「っ」

雄二はすぐさまその狙いをかわす。

「へえ、そっか。僕の実力も当然知っているわけか」

「まあな」

雄二はライターの火をつけ、苧部に向かって飛ばす。苧部はこの火をよけつつ、再び右手で雄二を狙う。それをすぐさま雄二はよける。

苧部の能力。それは手で作った銃で狙いを定めるとそこにマーカーを発生させる能力。そして苧部が手で触り、念じたものはそのマーカーに向かって飛んでゆく。どんなことがあるかと。マーカーを追尾して。そしてマーカーは苧部が気絶するか苧部が放ったものがマーカーに当たるまで絶対に消えない。どんなに苧部から離れたとしても。

「しまった」

雄二は苧部の狙いからよけきれず、左手にマーカーをつけられてしまう。

「ち、狙いがそれか。まあいい」

苧部は雄二の腹を狙っていたが、雄二がこちらの動きをしつかり見切ってきていたため狙いがそれってしまったのだ。しかしそれでも雄二にマーカーはつけられた。

苧部は足元に合った手のひらだいの石を広い、上にほうる。そして投げられて少しした瞬間、ものすごい勢いで雄二の左手めがけて飛んでいく。

「まずは弱め、だ」

雄二はこれをぎりぎりではよけるが石は雄二の左手をホーミングしてくる。

「くそ」

雄二はうまくタイミングを合わせて石を思いつき蹴っ飛ばす。石は飛んでいったが、すぐに方向転換し、そして雄二の左腕に直撃する。

「ぐわーっ。ぐ、いてえ」

雄二は左腕を押さえながらうずくまる。

「どうする？ 今ならまだ許してあげるけど」

「冗談」

雄二は苧部に向かってにやりと笑みを作りながら返答する。

「そう」

そして苧部は雄二に向かってまた右手を銃の形にして雄二を狙う。それに対し雄二は思いつき雄二と苧部の間に炎を広げ、苧部の視界を奪う。

「なるほど。でもここまでの炎はそんな長くは維持できない。時間稼ぎもいとこだ」

（へ、残念だったな）

木を隠すなら森の中。これだけの火があれば周りに火があっても気がつきにくい。そしてそれが普段、意識が薄いところならばなおさらだ。

「喰らえー」

そして雄二は苧部がいたところの上から思いつき火を下に飛ばした。火、自体の勢いはすさまじいが、火力は抑え目だ。相手を殺してしまっただけとはいけないから。

だがこの心配は無用だった。なぜなら雄二が火を解除したときには苧部は雄二が思っていたところよりはるかに離れた場所になっていたのだから。

「な、なぜそんなところに」

「おいおい、視界を隠されたんだっただけなら同じ場所にいたら危険だろ。そっちからの攻撃が飛んでくるかもしれないのに。そ

して君の能力は遠距離も使えるがどっちかかって言うとは中距離向けだ。そして僕の能力は……」

あらかじめ雄二がいたところに狙いをつけていた右手は、雄二が火を消した瞬間、しっかりと雄二を捕らえるのだった。そして雄二の左胸にはしっかりとマーカーが刻まれる。

「僕の能力は、遠距離向けだ」

苧部は言い終わると腰から本物の銃を取り出し、そして弾丸を一発こめる。もちろん自身の能力もつめて。

そして、銃のトリガーを引く。